解説

桂島　宣弘

私事で恐縮ではあるが、私にとって画期的「事件」となった子安思想史との出会いは、今から二十年以上前に遡る。近代天皇制イデオロギーの淵源の一つと思えた国学に対する研究を志していた私は、しかし国学あるいは後期水戸学から、のちの近代天皇制イデオロギーと関係のありそうな部分を摘出して、それを淵源として提示する「物語」としての戦後思想史の記述や、本居宣長の実証性を評価しながら他方でそのイデオロギーだけを切り離して批判する大方の研究に、どうしても飽き足らない思いを強めていた。そんなときに出会ったのが、子安宣邦『宣長と篤胤の世界』（中央公論社、一九七七年）だった。無論、子安先生自身が述べるように、本書（青土社初刊、一九九五年）やそれに先だって公刊された『本居宣長』（岩波書店、一九九二年）は、『宣長と篤胤の世界』に対して「みずからする批判の上になったもの」（『本居宣長』「あとがき」）であって、ここで二十年以上前の『宣長と篤胤の世界』を持ち出すのは不適当かもしれない。しかしながら、私は子安思想史との出会いというと、どうしても『宣長と篤胤の世界』を想起せずにはおれない。端的にいえば、それは子安先生自身がどのようにして本居宣長、さらに宣長研究と出会ったかが率直に吐露された書であり、その出会いのさまが戦後国学研究と大きく異なっていたことに、私は少なからぬ衝撃を受けたのだった。先生は、この書に次のように記している。

「宣長の思想の実体はなにかとまず規定してかかる理解の道によっては、彼の思想の世界はただそのかたわらをよぎられるにすぎないということになるのではないか」

「宣長のしんどさは、彼の思想の実体を規定してかかろうとするこちらの思惑を、彼は常にこえてしまっているところにあるように思われる」

無論、この書での先生は、「〈事〉にふれ合い、〈事〉に出会う人の心のありよう、そうした〈事〉から成る人の世界のありよう」を問う宣長を辿っていっているのであれば、『本居宣長』や本書において、「自己言及的な言説」の「再生」を見つめつつ宣長と対峙している姿勢とは、その主張の根幹が大きく相違していることは明白だ。しかしながら、今から思うと、この宣長の「思想の実体の理解」という近代学術の当然すぎると思えた方法に対する、ある種の困惑の率直な吐露こそは、先生自身にとっての「宣長問題」が公然と記述されたものであるという意味で、のちに近代学術総体の「宣長問題」が明確に対象化されるための重大な出発点であったと私は考えている。当時そんな先生の「宣長問題」など知る由もない私も、しかしながら宣長を、宣長の方法で「理解」せんとしてきた近代学術の危うさについての新鮮な問題提起を、この書のメッセージとして受けとめたのである。

この新鮮な問題提起は、一九七九年十一月の皇学館大学で開催された日本思想史学会で今度は多くの宣長研究者の前で行われた。「本居宣長の思想」がテーマとなっている関係で、大方が宣長讃辞的発表となっているその〈場〉でなされた報告は、今思い出しても戦慄さえ覚えるほどに衝撃的なものだった。子安先生は「宣長における『神』と『人』」と題する主題発表の中で、「宣長の神観念の意味は、『古事記伝』では探りえないようになっている」こと、つまり宣長の思想のトートロジカルな構造について問題を提起されたのである。自らの「宣長理解」を「内なる読み」を競って繰り広げるべきその〈場〉は、まさに宣長が日本思想史という学術的言説を伴って「再生」する現場そのものであり、そこでは先生の問題提起は、文字通り孤軍奮闘という感を免れてはいなかった。だが、文献学の祖として、

したがって日本思想史学の祖としても捉えられる宣長の「理解」を競うことが、決して問いえない問題が提起されていることは明白であった。今でこそ、メタヒストリカルな問題が問われることはやや珍しくなくなったが、子安先生は実に二十年以上前に経験的にその問題をわれわれに提示していたのだった。

先生自らの言を借りれば、そののち先生は「ときおり宣長に触れることはあっても私は宣長に正面することはなかった」という。だが、私の推測では、そののちの先生の徂徠学についての研究も（『「事件」としての徂徠学』［ちくま学芸文庫、二０００年］など）、実際は「宣長問題」とは切っても切れないものであったといわなければならない。というよりも、荻生徂徠に「『他者』としての古代中国への視座」を見いだしたときに、同時に「他者否定のための他者研究」としての姿を露わにした津田左右吉、近代「シナ学」とは、そのまま宣長の「自己言及的言説」や宣長を「再生」させつつ宣長と共に「自己言及」を繰り返す近代学術が醜い姿を露わにした瞬間であったと私は考えている。その意味では、先生は伊藤仁斎や荻生徂徠に研究の重点を移してのちも、江戸儒学という時間・空間的に二重の意味での外部性を刻印された言説という視点から、その対極に宣長、さらに「宣長問題」を背負う近代学術のありようを見据え続けていたのである。

この十数年の京都・大阪における子安先生を中心とした近世思想史研究会（のちに思想史・文化理論研究会と改称）での活動を振り返ると、この推測は決して間違っていなかったと思う。ほぼ毎月一度開催され、百余回に及ぶその研究会でわれわれがどの程度先生の方法を学びえたかについては、『江戸の思想』１～10 号（ぺりかん社、一九九五年～一九九九年）の参照を願うしかないが、先生に関していえば、それは『宣長と篤胤の世界』以来、宣長及び宣長研究が共同して構築してきたものに懐疑的にならざるをえなかった先生が、ついに近代学術総体に隠蔽されてきた「宣長問題」を明確に捕捉していく過程であったと思われる。すなわち宣長と共に実証性を蓄積させていく作業こそが一国思想史を実体化する当のものだという、これまでの宣長研究が宣長と共に隠蔽してきた問題が鋭くえぐり出されていく過程が、実はこの研究会の前半の時期と重なっているのである。先生自身、今はそれを簡明に「方法としての江戸」と名づけ、「視座『江戸』の設定が既存の江戸像を構成している近代の読み直しを指示し、それを可能にし、そして近代の読み直しが今度は江戸の新たな読み直しを課題として指示してくるという思想史的作業」を提唱するに至っているが（『江戸思想史講義』岩波書店、一九九八年）、それは『宣長と篤胤の世界』以来の、先生自身も内に捕らえられかねなかった「宣長問題」への一つの解答となっていると私は考えている。

ここで『宣長と篤胤の世界』以来ということを強調しているのは、近代宣長研究や戦後思想史研究がついに問うことができなかった問題を、子安先生が何故に問いえたのかといえば、それは先生の積年の『古事記伝』研究があってこそ初めて可能となるものであったということに注意を喚起したいからである。研究会のみならず、大阪大学やわたくしの勤務する立命館大学での大学院の講義・演習でも、先生はしばしば『古事記伝』をテキストとして取り上げられた。本書の読者からすると意外に思われるかもしれないが、そこでは、それこそ一言一句の細部にわたる文献学的ともいえる厳密な読みが全編にわたって実践された。無論、コンテキストや一言一句の解釈の底に横たわる宣長のイデオロギーは、最後には大きくクローズアップされることとなるが、それでもまずは宣長が『古事記』をどの

ように読んだかを、丁寧に辿っていくのが先生のやり方であった。すごいと思ったのは、「宣長問題」が、こうした緻密な学問実践において捕捉されるものであって、決して宣長のイデオロギー暴露では捉えられないことが、こうして示されていたことである。宣長のイデオロギー暴露ということであれば、その妥当性はともかくとして、既にわれわれは羽仁五郎らの研究を知っている（『日本における近代思想の前提』岩波書店、一九四八年）。それは、テキストの外部を問うことができても、決して言説内部を切り裂いて問題を析出することはできないことは、羽仁も本書で批判的に取り上げられている加藤周一と驚くほど同じような「国学の清新」「国学の限界」という枠で国学を捉えていることに明らかである（もっとも、羽仁は自らのイデオロギーについて自覚していたことは無視してはならないだろう）。これに対して、先生は近代の学術的言説が、宣長の『古事記伝』などを「正しい言説」としながら、「直毘霊」などのイデオロギーのみを問題とすることで、実は「正しい言説」と捉える中で共有し隠蔽するイデオロギーをこそえぐり出していこうとする。それは、『古事記伝』の語りに何度も耳を傾けなければとうてい不可能なことであろう。しかも大方が『古事記伝』の実証的と思われる部分に目を奪われ、その故に宣長の語りを共有してしまっていることを思うならば、本書の重大な意義とはこの宣長の語りに何度も耳を傾け、しかしついに『古事記伝』全体のイデオロギー性が示されていった点にあると私は考えている。この点がことに鮮明に示されていると思われるのは、本書の「やまとことば」を析出している部分で（「『やまとことば』成立の語り」など）、宣長以降のわれわれは、宣長以降の国語学者と共に「漢字文化」の「介入」以前の「口誦」の「やまとことば」を前提としながら、『古事記伝』と共にその復元の実証性のいかんという問題群に立ち向かうこととなるが、上田秋成がそれを「私説」と一蹴したのとは対照的に、近代の学術的言説はこうした作業によって、宣長と共に「やまとことば」の成立をさらに増幅して語っていくことになることが明らかにされている。まさに『古事記伝』および近代の宣長研究に精通しなければ、とうていなしえない分析だということができよう。

ところで、構成からもただちに判明するように、本書は宣長と並んで平田篤胤についても詳細に論じている。実は『宣長と篤胤の世界』以来、先生の国学へのアプローチは、常に宣長と篤胤を同時に論じていくというスタイルを採っている。それは、宣長を評価し篤胤を忌避する近代学術の視座に対峙せんとする先生の姿勢が、意図的に選び取っているスタイルであり、そこには両者を同時に論じないことで隠蔽される問題に対する先生の冷徹なまなざしがあるのは明らかである。この点については、本書では次のように述べられている。

> 「近代の『国学研究』はこの篤胤国学の出現に事件性を見ることはない。むしろその事件性を国学概念の新たな展開過程の叙述のうちに解消してしまうか、あるいは己れの国学史の叙述から篤胤国学ともどもに排除してしまうかの何れかであった」

この篤胤が近代学術から忌避されがちであったのは、実は篤胤が宣長のイデオロギー性を捉え、それを神学として再構成していったからだと本書は説いている。近代宣長研究は、篤胤を忌避することによって、換言するならば篤胤が宣長から赤裸々に受けとめ展開させた部分を隠蔽することで、初めて宣長を近代学術的言説の先駆として位置づけることをなしえたのである。この意味では、篤胤の忌避という「篤胤問題」は、「宣長問題」を構成する重要な要件なのである。

それにしても、篤胤に対してはやや子安先生の評価が優しくなっていると感じるのは、はたして私だけであろうか。実はそこに特権的な言説と対峙しようとする先生の気概のようなものを私は感じ取っている。宣長あるいは宣長を高く評価してきた近代学術の特権性に対する先生の憎悪にも近い感覚がそこにある。他方で、篤胤や佐藤信淵、さらにはそれらに連なる在野の異端的言説に対して、先生のまなざしは暖かい。対照的に、それらを特権的立場から論じる民俗学、民衆史などについても冷ややかなものがあるようだ。この点は、やや古いものだが、先生が佐藤新淵について次のように述べて以来、比較的一貫したものがあるように思える。そこには、先生の近代を立ち上げてきた特権的知をこそ、自戒の念もこめて痛烈に批判しようとする強い企図を感じ取ることができるのではなかろうか。

「その大言壮語のうちに、文政から天保へといよいよ手づまり的状況を見せてくる時代に対する、あるいはその時代をこえ出ていく非特権的知識人の観念の作業の跡をわれわれは見出すのである」(『日本の名著　平田篤胤』中央公論社、一九七六年)

最後に本書が、まさに近代学術の言遂行が問題視され始めた時期に出版される意義について言及しておきたい。先生は本書の初版の「あとがき」で次のように述べている。

「本書によって新たな宣長像の提示を期待する読者が、むしろ宣長像の再構築といったことを〈かっこ〉にくくりこむことによって開かれる「宣長問題」という瞭野が、いかに広く、また重大であるかを本書によって理解されることを切望する」

ここでの訴えは、本書が決して今までの宣長研究書におさまらないものであるのみならず、本書及び先生の思想史研究の全体が、「近代以後をいわれる現在の日本」に発信された、すぐれて実践的なものであることをも物語っている。そして、この点こそが、本書の意義としてとくに強調されるべきことなのだと思う。なるほど、ポスト冷戦が叫ばれている中で、戦後の学術の多くが転換を迫られ、あるいはその間隙をぬって今また歴史修正主義ともいうべき国民史の書き換えが公然と主張されるに至っている。それはそれとして重大な問題といわざるをえないが、それらの動向と対峙していくためにも問題なのは、状況と無関係といわんばかりの実証的思想史研究だろう。近代学術の内部を切り裂く本書の攻撃性が発揮されるのは、そうした〈場〉においてである。本書が明らかにしているのは、状況と無関係といわんばかりの学術的言説こそが、まさにその特権性をかざしながら行ってきた言遂行の歴史性なのだから。

本書や先に文庫におさめられた『「事件」としての徂徠学』によって、確かに戦後の思想史研究は新しい局面を迎えたといってよいだろう。ようやくにして、思想史研究が国民史としてあった局面を食い破ることができるのかが射程に入ってきたようだ。そして、子安先生はいつもの如くに、その実践の先頭をきって走り出している。

（日本思想史）